

第三章 布留遺跡周辺の遺跡

1) 別所ツルベ遺跡

天理市別所町

天理市街地の北方の別所町字ツルベと袴田に位置している。通称豊田山から南方へ延びた丘陵裾に近い標高 70m 前後の緩斜面上に遺構の広がり確認されている。遺跡北側は丘陵末端部が延び、南西側には微高地が存在し、両者に挟まれた範囲に遺跡が展開している。

縄文時代後期前半の土坑、落ち込み状遺構、住居状遺構、埋甕遺構、溝など、遺構が分布する調査地では、幅約 4 m の自然流路が検出されている。埋甕遺構は調査地の中央西側において、4 基検出されており、長さ 60～80cm の規模の土坑内に、深鉢を正位に埋置したもので、いずれも底部が穿孔されているなど等質性が窺える。これとは別に土坑内に横転した状態で出土した深鉢があるが、これにも底部に焼成後の穿孔が認められ、上記の埋甕遺構と同一の性格の遺構とみて差し支えないだろう。人骨などは遺存していなかったが、土坑内での据え付けや土器の扱いなどからみて、これらが再葬行為による遺構の可能性を示唆する。なおその中の 1 基からは、後述する硬玉大珠が出土している。

その南西側の微高地に近い一角からは、2 基の不整形な土坑が検出されている。土坑内には規則的に配置されていないが、柱穴状の小穴が多く認められる。全容は不明だが規模の大きい方で直径が約 8 m、もう一方が直径 6 m 以上を測る、どちらも不整形な平面を呈しているものの、報告では竪穴住居の可能性があるとしている。なお南側に位置する不整形な土坑の床面からは、上記と同様の埋甕遺構が検出されている。

出土遺物の大半は後期前半から中葉の北白川上層式で、なかでもいわゆる縁帯文土器が盛行する時期が多くを占めている。有文・無文にかかわらずわずかに反り気味に長く延びる口縁部先端は、幅を持った肥厚口縁とする。有文土器

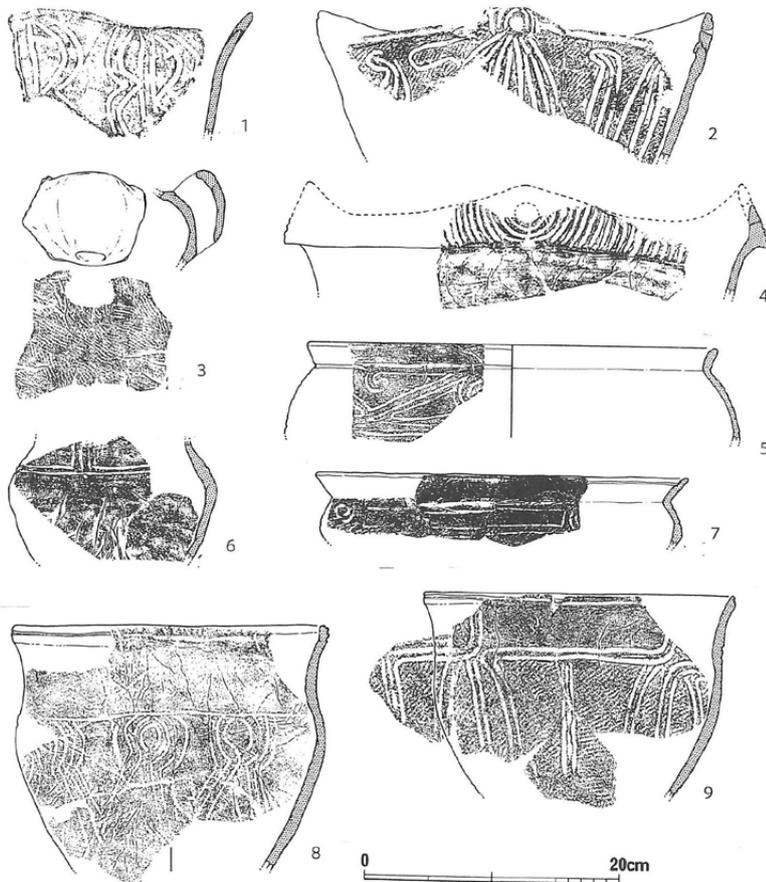


図1 別所ツルベ遺跡から出土した縄文時代後期の土器
(青木ほか 1998)

はその口縁部に縄文、斜沈線、同心円沈線文を配している。これらには波状口縁も少なくない。くびれ部は基本的に無文とするものが多いが、胴部文様帯との間を、多条の沈線や刻み目を施した隆線で繋ぐものもある。深鉢以外に無文の皿状の浅鉢や、椀形の小型鉢も存在する。これらの土器は近畿地方中部の特徴を有する在地の土器であるが、同時に出土した土器には、九州の鐘ヶ崎式、北近畿から山陰地方の布勢式、北陸の気屋式、関東地方の堀之内1式や同2式のほか加曾利B1式などの特徴を有するもののほか、東北地方の土器の橋状把手の要素を持つ土器など、他地域系統の土器が少なからず認められる。これらの時期以外の土器には、後期初頭の土器がわずかにあるほか、長原式とみられる突帯文土器が少量出土していて、同時に出土している弥生時代前期の土器との関係に注意したい。

石器類は縄文時代後期前半段階の通有の器種が揃っている。石材に関しては、石鏃や石匙など剥片石器はサヌカイトが用いられ、磨製石斧のほか、石皿や磨石・敲石など礫・磨製石器には数種類の石材が用いられるなか、比較的玄武岩を使用した石器が目につく。両面に研磨面を持つ石皿には水銀朱の付着が認められる。

出土品の中でとりわけ注目されるのは、先に触れた硬玉製品だろう。大珠と呼ぶには長さが2.6cm、幅2.0cmと小型だが、片側から穿った直径約4mmの孔は穿孔技術の高さを示し、翡翠の神秘的な淡い緑色を呈した部分が鮮やかである。隣接する布留遺跡堂垣内地区から出土した硬玉大珠と共に、当時の奢侈品の流通を考える上では貴重な出土品である。

【文献】

青木勘時ほか 1998「別所ツルベ遺跡」『天理市埋蔵文化財調査概報 平成6・7年度』

松田真一 2017『奈良県の縄文遺跡』青垣出版

2) 西山古墳

天理市杣之内町

国史跡 1927年（昭和2年）指定

西山古墳は全国最大の規模を誇る前方後方墳で、杣之内古墳群の中で盟主的な存在と評されている。前方部を西南西に向けた墳丘の全長は約190m、前方部長さ91m、幅72m、高さ11m、後方部は長さ幅共に94m、高さ16mを測る。墳丘は3段に築かれるが、前方後方の形を呈するのは、1段目だけで、2段目と3段目は前方後円形として築かれた特異な形態となっている。その2段目以上の前方後円形はくびれ部が後方部の中心に寄るため、後円部の大きさに対して、前方部が90mもの長大な形状を呈している。周濠は前方部南西側に存在する池が、その名残と見做せる形状と、墳丘周囲の畦畔の痕跡から東西約230m、南北約163mの長方形の周濠が当初に存在したと考えられる。なお墳丘形態については、双方中方墳とする考えがあるが、後方部東側の現状の等高線の形状から推し量る限り、その根拠を見出すことはできない。

当古墳の本格的な発掘調査はこれまでに行われていないが、埋葬施設に関しては、かつて後方部の墳頂付近に板状の石材（大阪府柏原市芝山付近の橄欖石安山岩）が散乱していたとされ、豎

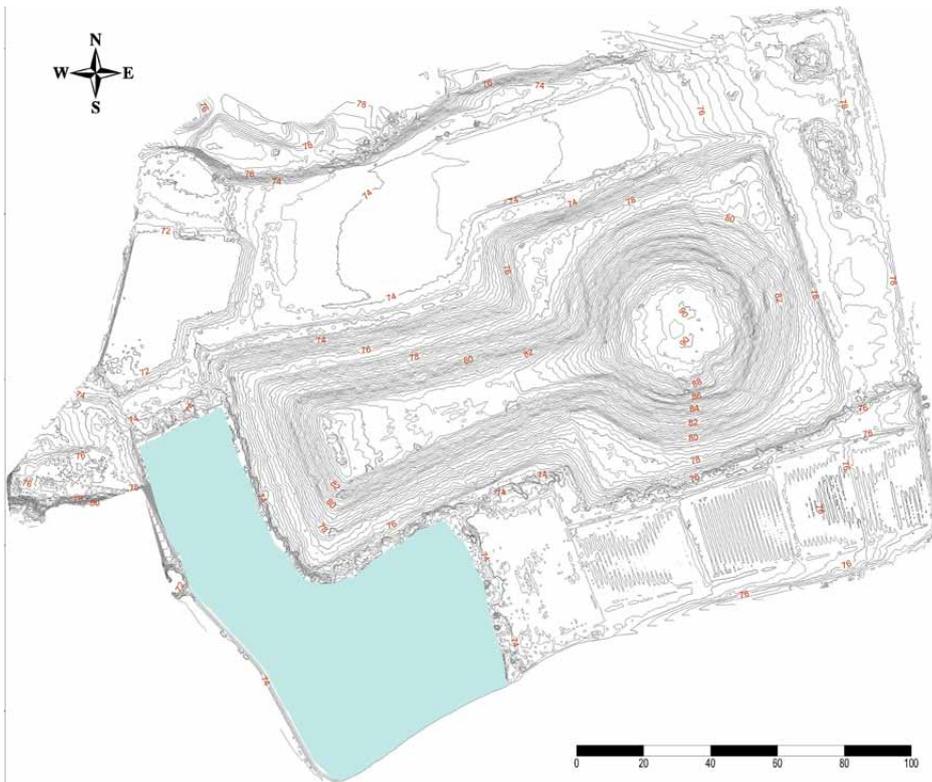


図2 西山古墳地形測量図（天理大学考古学・民俗学研究室提供）

穴式石室が構築されていたと考えられる。

部分的な発掘調査が前方部前面と、北側の周濠の外側で実施されており、前者では前方部の墳丘裾を確認している。また後者は周濠の北側に隣接する塚穴山古墳の墳丘調査に際して、下層から西山古墳の外堤を確認していて、そこから円筒埴輪を棺とした埴輪棺墓などが3基発見されている。円筒埴輪は西山古墳に使用された埴輪と同種と見做せるもので、古墳造営に近い時期の陪葬墓と考えられ



図3 南西上空から見た西山古墳

る。

西山古墳の墳丘や周辺から採集などによって得られた考古資料には円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、家形埴輪、草摺形埴輪などがあり、円筒埴輪には鱗付円筒埴輪を含み、鱗部にも突帯を持つ円筒埴輪もある。墳丘後方部頂部には大きな盗掘坑があり、これまでに竪穴式石室から持ち出された副葬品の一部が採集された記録や、その現物などが知られている。

副葬品と思われる出土品には波文帯神獸鏡とみられる鏡、車輪石と鍬形石製品の碧玉製品、耳環、装身具としてはほかに管玉、武器には鉄剣、鉄刀などがある。

なお本古墳に関連する資料として紹介されている、興味深い2点の大型の加工石材が付近に存在している。この石材はかつて天理市街地を通過する上街道に架けられていた橋梁材で、現在は市座神社の境内に置かれている元青石橋の石材と、同じく移動させられて、現在は天理図書館脇の植え込みに置かれている元化粧橋の橋梁材として使われていたもので、どちらも西山古墳に由来する石材であるとした考察がある。前者は長さ約3.7m、幅1.6m 後者は約2.8m、幅約1.6mを測り、両者とも厚さは約30cmで、石材の大きさからみると板石状である。前者は2個所に、後者は1個所に円孔が穿たれており、孔径はやや異なるが類似した穿孔によるものと考えられる。石材は前者が緑色の結晶片岩、後者は花崗閃緑岩とみられており、用途については竪穴式石室の天井石とみる向きが多いが、今のところ検証できる事例には恵まれない。

西山古墳は採集された副葬品の内容のほか、墳丘形態や埴輪の型式の年代観に準拠すれば、杣之内古墳群の中では最も古い前期後半の古墳とされ、4世紀後半頃の造営と考えられる。

【文献】

西谷真治 1974「天理市所在の有孔板石について」『天理大学学報』第25巻第4号 天理大学学術研究会



図4 西山古墳外堤埴輪棺墓の朝顔形埴輪・円筒埴輪 (天理市教育委員会提供)

置田雅昭 1974「大和の前方後方墳」『考古学雑誌』第59巻第4号

桑原久男・小田木治太郎・山内紀嗣ほか 2014『杣之内古墳群の研究』杣之内古墳群研究会

3) 西乗鞍古墳

天理市杣之内町

国史跡 2018年（平成30年）指定

西乗鞍古墳は杣之内古墳群の中にあつて、南側に隣接して分布する3基の前方後円墳の中の1基で、最も規模の大きい古墳である。墳丘は前方部をほぼ南に向けた全長約118m、後円部径約66m、高さ約16m、前方部幅約90m、高さ約16mの規模を有している。墳丘は2段築成であることが、墳丘横断面図によって認識できる。南面する前方部前面は、墳丘の崩落によるものとみられる等高線の乱れが認められる。後円部の墳頂は東西15m、南北17m前後の平坦面がある。前方部も墳頂は平坦だが、これは1932年の陸軍の演習や「大元帥陛下駐蹕之處」の石碑建立などの際に造成された可能性もあるが定かではない。墳丘のくびれ部の東西には1段目が外に張り出すように造出しが設けられている。規模は原形をよく留めている東側で幅約16m、奥行き約12mである。西側はやや等高線が乱れているが、同規模の造出しとして造成されたと思われる。墳丘上の施設としては葺石が全面に認められ、また墳丘の各所で円筒埴輪の破片が採集されている。

墳丘と周囲を含む地形図を見ると、周辺より一段高くなった幅広い平坦面に墳丘が築かれていることが分かる。平坦面の縁には高まりが確認でき、周濠の外に外堤が設けられていたことが明らかで、周濠の発掘調査でも外堤を確認している。古墳の全体図からは、盾形周濠が巡っていたことが判別できる。墳丘と周濠及び外堤を含めた全長（南北長）は約165mである。

周濠や外堤及び古墳南側の掘割り部の発掘調査によって、墳丘から転落した葺石や埴輪のほか、須恵器大甕・杯や、土師器壺・椀などが出土している。また造出し部からは蓋形埴輪も出土している。埴輪にはほかにも朝顔形、人物、家形があり、円筒埴



図5 西乗鞍古墳墳丘測量図（天理市教育委員会提供）

輪には須恵質のものが含まれている。

埋葬施設について推測しうる有力な情報はないが、後円部東側の墳丘裾部の土取り跡付近で、人頭大の礫が見つかっていて、石室構築材の可能性があると指摘がある程度で、今後の調査を待たねばならない。出土遺物の示す古墳の年代が、中期終末前後とみられることから、横穴式石室が設けられていた可能性が高い。

【文献】

亀田博 1982「西乗鞍古墳南遺跡発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報』1981年度（第1分冊）
奈良県立橿原考古学研究所

桑原久男・小田木治太郎・山内紀嗣ほか 2014『杣之内古墳群の研究』杣之内古墳群研究会

石田大輔ほか 2016『杣之内古墳群1 西乗鞍古墳』天理市埋蔵文化財調査報告第10集

4) 小墓古墳

天理市杣之内町

小墓古墳は西乗鞍古墳の北西側に近い、杣之内町に所在している前方後円墳で、南西に前方部を向けた墳丘は著しく改変を受けている。造営当初の形状はかなり損なわれ、墳頂部の形状や段築構造は明らかにし得ないほど崩れていて、墳丘の芯部が残存していると考えた方が良さ



図6 西上空から見た西乗鞍古墳（天理市教育委員会提供）

う。周濠の発掘調査や、現在の墳丘形状などを踏まえた墳形の想定によれば、全長は見かけ上の81 mをかなり上回る規模であったと考えられる。後円部の高さは7.8m、前方部の高さは6.1mを測る。前方部の幅や、後円部の直径なども現状の計測値は余り意味をなさない。

後円部の東側と北側の周濠部の発掘調査が行われ、周濠の規模は幅が15m前後、最も深い部分で2.8mであることが判明した。また墳丘周囲に現在も残る畦畔の形状を考慮すると、築造当初の盾形周濠の存在が推定できるほか、周濠内を仕切る土手状の陸橋の存在も明らかになっている。

墳丘の把握が難しい一方で、周濠の発掘調査では多数の木製品や埴輪など、豊富な資料が出土したことは特筆できる。木製品は周濠内や周濠に近い位置に樹立させたと思われる木製立物で、蓋形、笠形、盾形、刀形、鉾形、翳形などの器財形と、槽、火鑽臼、槌、耳杯形木製品などがある。材種はヒノキ材の翳形を除きそのほかはコウヤマキが用いられている。

埴輪は円筒、朝顔形、蓋形、盾形、鞍形、人物、水鳥形、鶏形、猪形、家形など種類も多彩である。円筒埴輪には突帯が7段構成の個体もあるほか、須恵質の埴輪も少数含んでいる。家形埴輪は数種あり復元された入母屋建物は、円柱を用いた高床式で格式の高さが窺われる。人物埴輪には甲冑を装った武人、巫女、力士のほか入れ墨を表現した盾持人物埴輪などが見られる。猪形をはじめとした動物埴輪も少なくなく、複数体の馬形や猿の親子を表現したと思われる破片も出土している。蓋形埴輪には笠部に線刻による鉄鍬の表現が見られるなど、種類の多さと共に類例の知られていない珍しい埴輪も存在する。

本古墳の主に周濠から出した埴輪と木製立物の意義は、古墳築造時の墳丘と周濠の葬送儀礼装



図7 小墓古墳周濠内の遺物出土状況（天理市教育委員会提供）

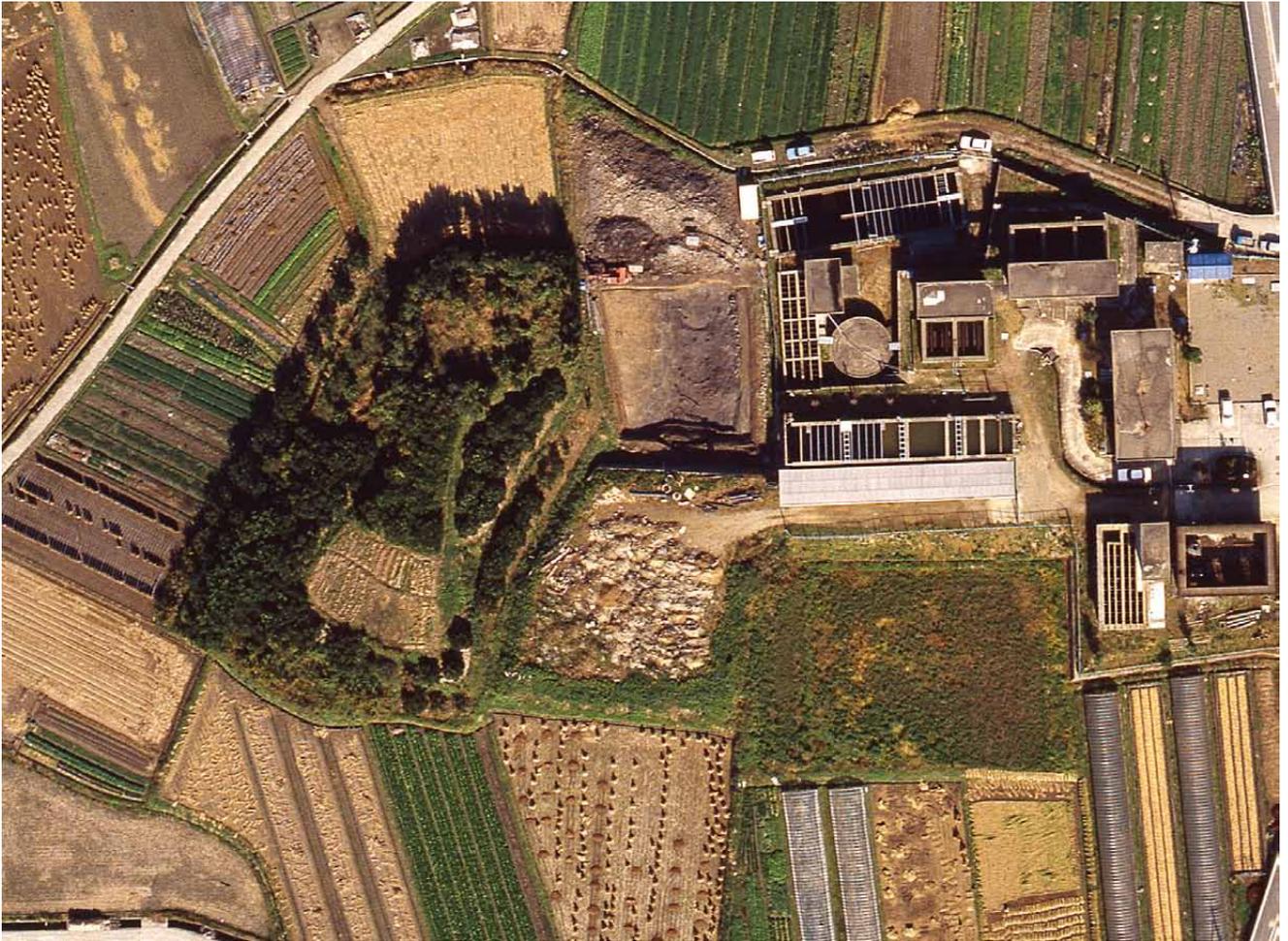


図8 上空から見た小墓古墳（天理市教育委員会提供）

置の復元や意味を考える際の重要な手掛かりを提供したことにあるといえる。古墳の造営は出土した埴輪や須恵器の年代観から、後期前半でも古い段階と考えられる。

【文献】

泉武編 1988「小墓古墳」『天理市埋蔵文化財調査報告 昭和 61・62 年度』天理市教育委員会
桑原久男・小田木治太郎・山内紀嗣ほか 2014『杣之内古墳群の研究』杣之内古墳群研究会

5) 東乗鞍古墳

天理市杣之内町

東乗鞍古墳は西乗鞍古墳の東に立地し、前方部を西南西に向けた前方後円墳である。墳丘は2段築成で全長約 75 m、後円部直径約 44 m、高さ約 10 m、前方部幅約 70m、高さ約 11 mを測り、前方部前面が大きく開くことや、基底部からの比高では後円部を上回るなど、前方部がかなり発達した形態を呈している。これまでに後円部東側と前方部西側では周濠が確認されているが、幅が 10 m、深さが 2m に満たない規模であった。また墳丘の外側には一定の幅を持った平坦な地形が認められるが、周濠の外に外堤が設けられていた痕跡と捉えられている。墳丘からは埴輪が出土しているが、数点程度の細片に限られていて、墳丘に用いられていたとしてもかなり限定的で

あったようだ。

埋葬施設は後円部南側に開口している横穴式石室の存在が知られているが、天井部から玄室奥への土砂の流入が著しく、詳らかでない部分があることや、石棺についてもかつて確認されていた棺やその一部が散逸している。横穴式石室は墳丘2段目基底に開口する西片袖式の石室で、玄室側壁は比較的大型の石材を内傾気味に4段に積み上げ、3石の天井石を横架する。玄室の全長5.7m、幅2.4m、高さ現状で3.3m、羨道は幅1.7m、高さ現状で1.5m、長さは現状4.6mまで確認でき側壁は2段に積む。

石室内に安置された石棺については、野淵龍潜『大和國古墳墓取調書』に調査の記録があるが、そこには玄室内に2基の石棺が描かれており、前後に2基の家形石棺が置かれていたことが分かる。前棺は組合式家形石棺で、現在は底石1枚だけが確認でき、棺身や蓋の部材は失われてしまったと思われる。棺材は二上山ドンズルボウ層の凝灰岩で、二上山白石と呼ばれる石材を用いている。奥棺は刳抜式家形石棺で、盗掘によって一部を欠くが棺の全容が分かる。蓋石は上部平坦面が狭く垂直面も短い。縄掛突起は恐らく4突起で、傾斜面にあって小さくやや上向きに造り出され、棺身も裾が窄まり気味の特徴があり、家形石棺としては古い要素を備えている。石材は阿蘇の溶結凝灰岩（通称馬門石）と鑑定されている。阿蘇溶結凝灰岩製の石棺は、県内では本古墳以外に桜井市慶雲時石棺仏、同市金屋石棺、同市兜塚古墳石棺など、天理市から桜井市の古墳の石棺に使われている。

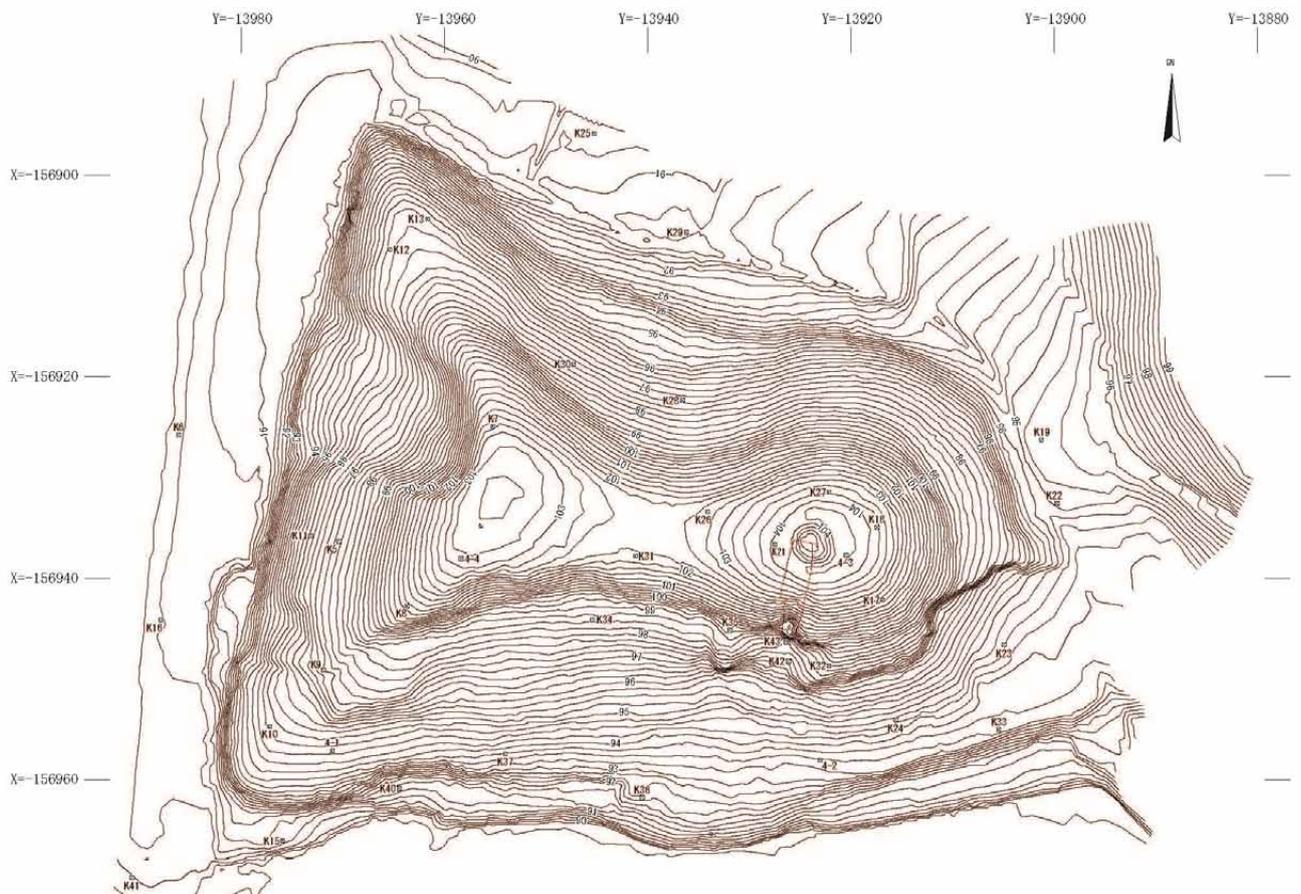


図9 東乗鞍古墳墳丘測量図（天理大学考古学・民俗学研究室提供）

出土品については、先に触れた墳丘から出土した埴輪のほかに、本古墳石室から出土したとされる鉄地金銅貼馬具と小札が、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館に保管されている。

築造年代は墳丘形態と石棺の型式的特点を考慮すると、後期初頭から大きく外れることはないだろう。

【文献】

野淵龍潜 1893『大和國古墳墓取調書』

佐藤小吉 1916「東乗鞍ノ古墳」『奈良県史蹟勝地調査會報告書第3回』奈良縣

千賀久 1997「畿内横穴式石室成立期の様相」『古文化論叢－伊達先生古稀記念論集－』

桑原久男・小田木治太郎・山内紀嗣ほか 2014『杣之内古墳群の研究』杣之内古墳群研究会



図10 東乗鞍古墳横穴式石室内の石棺
(天理市教育委員会提供)

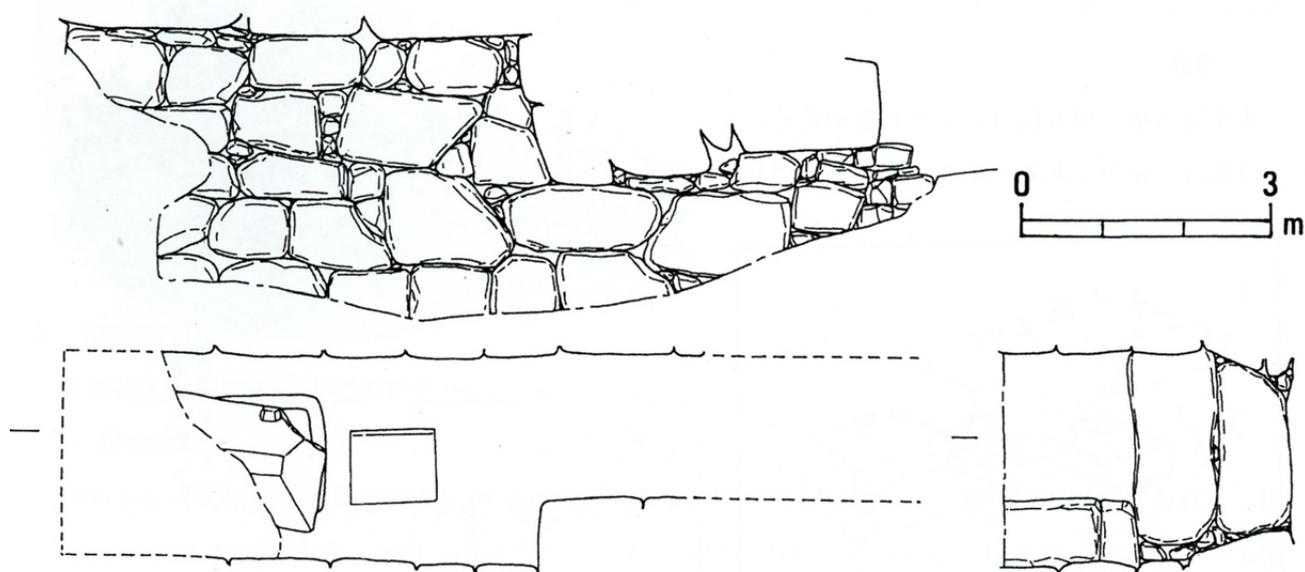


図11 東乗鞍古墳横穴式石室実測図 (千賀1997)

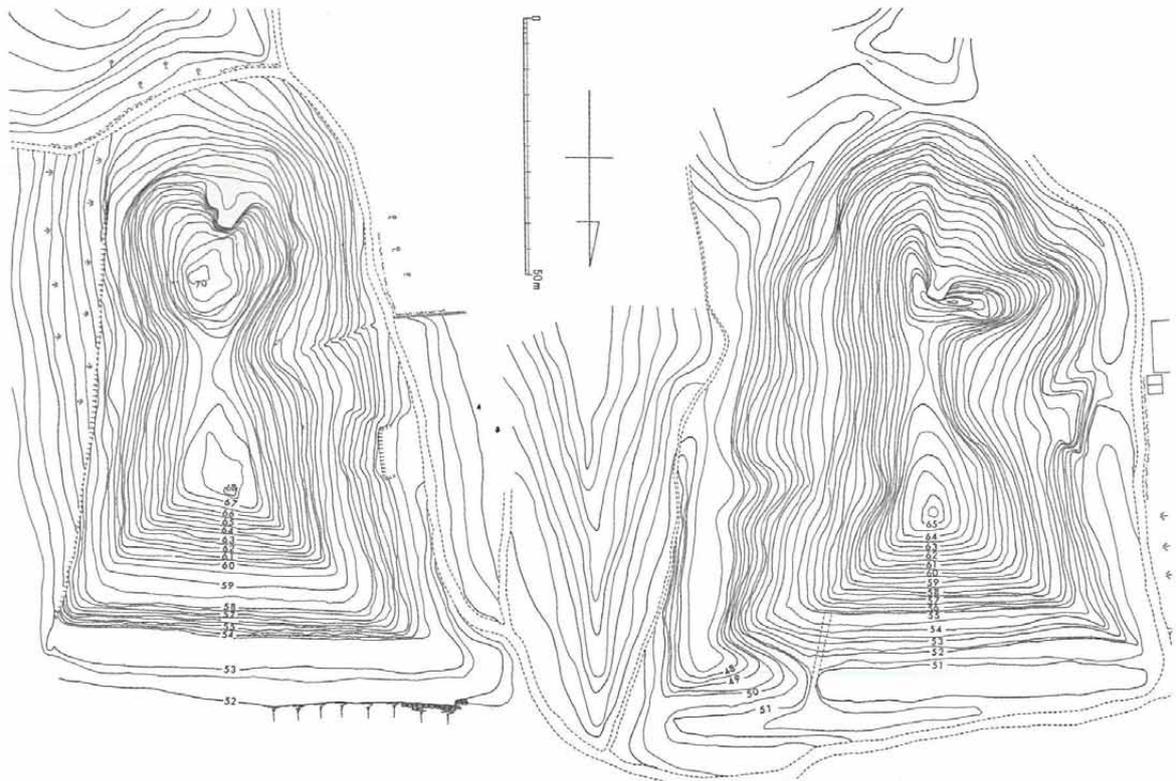


図12 ウワナリ塚古墳(左)・石上大塚古墳(右) 墳丘測量図(伊達1976)

6) ウワナリ塚古墳

天理市石上町

天理市街地から約3km北東方向の丘陵に立地する前方後円墳で、石上大塚古墳と共に、北側を東西方向に形成された岩屋谷を望むように造営されている。墳丘は2段築成で全長約110m、後円部直径約74m、高さ約16m、前方部幅約109m、高さ約14mの規模があり、前方部はほぼ北を向く。墳丘は下段が丘陵地形を利用した地山成形で、上段をほぼ盛土で造営したとみて良い。西側のくびれ部の等高線の形状から、前方部寄りに造出しの存在が認められるが、東側の造出しについては、現地形からは存在が確認できない。前方部墳丘の外側や西側にやや幅がある平坦面が認められ、現状で周濠状の窪んだ地形は観察できないが、周濠や外堤もしくは掘割りが存在していた可能性もある。墳丘段築には円筒埴輪が配置されていたと推定する意見もあるが、確かな埴輪採集資料は、前方部に付帯する平坦面で得られている。

埋葬施設は後円部南側に開口する横穴式石室である。大

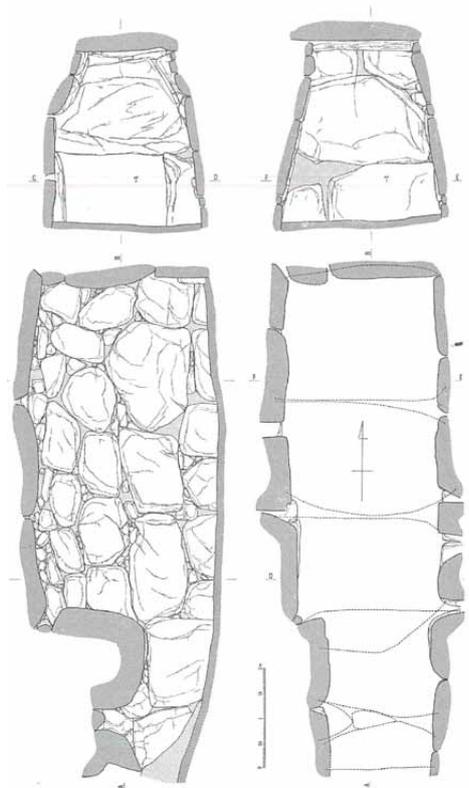


図13 ウワナリ塚古墳横穴式石室 実測図(伊達1976)

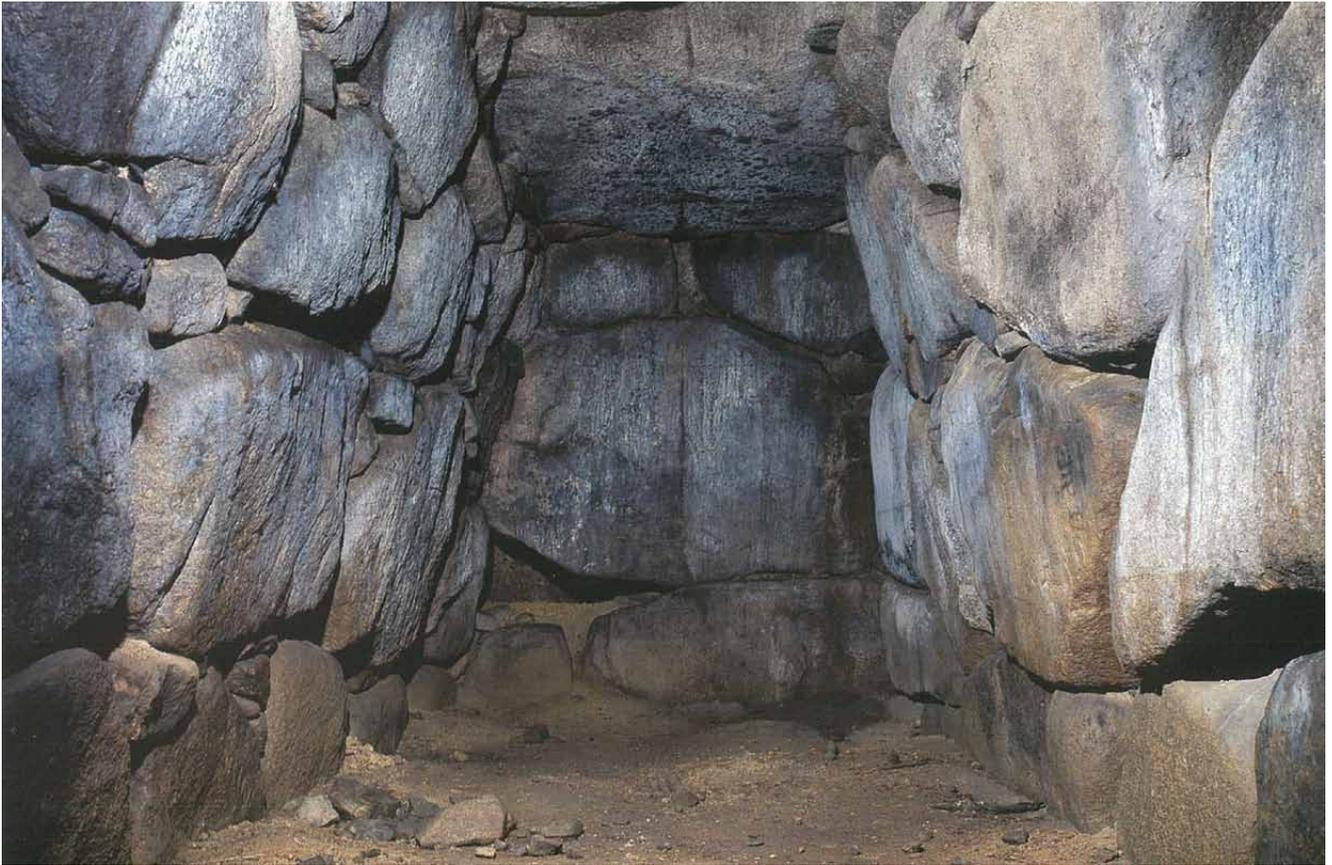


図 14 ウワナリ塚古墳横穴式石室（天理市教育委員会提供）

型の花崗岩石材を組み上げた両袖式の石室で、玄室の側壁は4段に積まれ、天井石は3枚の大石を横架している。石室の規模は、玄室の長さ約6.9m、幅約3m、高さ約3.6m、羨道は推定長9m前後、幅2.1mである。石室内には床に敷かれていた礫が散乱し、安置されていたと推定される、凝灰岩製石棺の破片が出土している。

これまで発掘調査が行われていないため、本古墳に関わる出土品の情報は少ないが、わずかに前方部で採集された円筒埴輪や、くびれ部で出土した須恵器などがある。これらの考古資料のほか、墳丘形態及び石室の構造などから、後期前半の古墳で、6世紀前半から中葉の造営と考えられている。

【文献】

小島俊次 1958「考古学的考察」『天理市史』（小島俊次 1976「埋蔵文化財」『改訂天理市史』下巻を併せて参考とした）

伊達宗泰 1976「第4章第2節 ウワナリ塚古墳」『天理市石上・豊田古墳群』Ⅱ 奈良県立橿原考古学研究所

泉武 2001「65 ウワナリ塚古墳」『大和前方後円墳集成』奈良県立橿原考古学研究所

7) 石上大塚古墳

天理市石上町

ウワナリ塚古墳の西側に並ぶように、前方部をほぼ北に向けて岩屋谷を望む丘陵上に築かれた大型前方後円墳。墳丘は全長約 107m、後円部直径約 67 m、高さ約 14m、前方部幅約 82 m、高さ約 14m で、ウワナリ塚古墳と比較すると、わずかだが規模は小振りである。墳丘は 2 段築成だが上段の斜面がかなり急傾斜となっている。西側くびれ部には、前方部寄りに設けられた方形の造出しの存在が確認でき、幅約 13m、奥行き約 10 m、高さ約 2 m の規模があり、墳丘測量図でも明瞭である。東側も造出しと思われる地形が見られるが、西側の造出しほど明確でなく、存在も含めて将来の調査に待たねばならない。墳丘下段は地山を削り出し成形し、上段を盛土造成によって築いていたと考えられる。墳丘の周囲に巡らされた周濠と外堤の存在も、ウワナリ塚古墳よりも歴然としている。特に前方部前面と西側は明瞭に観察でき、10m 前後の幅の周濠が推定できるほか、周濠は墳丘北東部に存在する、幅約 2m の陸橋によって仕切られていることも分かる。

墳丘上には礫が散乱し葺石が敷設されていたことが分かる。また墳丘で円筒埴輪が採取されていると聞かすが、数多く配置されていた可能性は少ない。

埋葬施設もウワナリ塚古墳と同様に、花崗岩を用いた横穴式石室が、後円部の南に開口するように設けられていた。但し盗掘により多くの石室の石材が失われていて、石室の規模や形態など詳しい構造は詳らかではない。但し発掘調査による石室最下段での計測では玄室長 6.4m、幅 2.8m、羨道長 9m（推定）、幅 1.7m、という数値が得られ、石室形態は東に袖部を造る片袖式石室である。また玄室床面が礫敷きされていたことや、凝灰岩製の石棺の破片が出土していたことも明らかになっている。

古墳の年代に関しては確たる材料に恵まれないが、墳丘や石室形態などからみて、ウワナリ塚古墳に後続して、後期中葉前後の造営と想定できる。

【文献】

小島俊次 1958「考古学的考察」『天理市史』（小島俊次 1976「埋蔵文化財」『改訂天理市史』下巻を併せて参考とした）

泉武 2001「64 石上大塚古墳」『大和前方後円墳集成』奈良県立橿原考古学研究所

8) 別所大塚古墳

天理市別所町

ウワナリ塚古墳、石上大塚古墳の位置する丘陵が南西に派生する先端部に位置する、北東向きの前方後円墳である。別所町の集落の北東に位置する。古墳は丘陵先端部を掘削することにより前方部端を造り出し、墳丘を構築している。

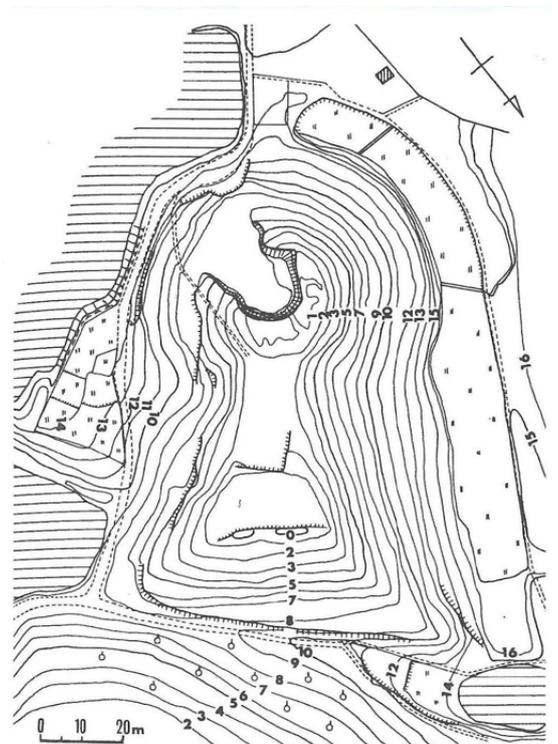


図 15 別所大塚古墳墳丘測量図
(伊達 1976)



図 16 空から見た別所大塚古墳（天理市教育委員会提供）

墳丘は2段築成で、全長125 m、後円部径85 m、前方部幅105 mあり、周囲には馬蹄形の濠を巡らしており、その幅は後円部で10 m、くびれ部で15 m、前方部で13 mとされる。埴輪片が採集されていることから、埴輪列があったと推測され葺石もあったと考えられている。

埋葬施設は後円部が大きく破壊されているため、何の手掛かりも残されていないが、大正2年刊の『奈良県山辺郡誌』には「往古より塚穴ありしが」とあるところから、横穴式石室であったと考えられている。破壊された墳丘の状況から南北に主軸をおく横穴式石室で全長20m、幅3～4 m、高さ4 m程の規模があったのではないかと推測されている。

また、明治26(1893)年の『大和國古墳墓取調書』によると、古墳は大きく破壊され、ここからは「五尺四方斗ノ石棺ヲ出シ」破碎して売却したとあるところから、内部には石棺が納められていたことが分かる。このほか、多数の金属器や土器が出土したことが伝えられる。このことから、古墳は明治時代には既に大きく破壊されていたことが分かる。

横穴式石室の石材も出土遺物も残されていないが、古墳の時期は古墳時代後期後半頃と考えられている。

【文献】

山辺郡教育会 1913『奈良県山辺郡誌』中巻

伊達宗泰 1976「第4章第3節 別所大塚古墳」『天理市石上・豊田古墳群』Ⅱ 奈良県立橿原考古学研究所

9) ハミ塚古墳

天理市岩屋町

天理市岩屋町の高瀬川北岸、天理東インターチェンジ北西約100mに所在する横穴式石室を埋葬施設とする終末期古墳である。古墳の東北方の山中には、花崗岩の切石の横穴式石室を有する一辺約18mの古墳時代終末期の方墳、塚平古墳がある。

ハミ塚古墳の石室は名阪国道敷設工事に際して行われた高瀬川の拡幅工事に伴う側道工事により羨道部の石材が抜き取られている。また、1994年の古墳の南の道路拡張の工事の際、巨石が露出したため、羨道部と墳丘断面の調査が行われた。

墳丘周囲は大きく削られていたが、1997年からの調査により東西46.7m、南北推定44.1mの方墳で、東西と北側に濠があることが判明した。濠の幅は北で8m、西で9mある。

埋葬施設は表面に漆喰を塗った巨大な花崗岩の横穴式石室で南西に開口する。工事により羨道の石材は一部抜き取られたため、右側壁が2石、左側壁が3石が1段残存するのみである。幅は約1.8m、右側壁は現状で長さ5mある。玄室は長5.70m、奥壁幅2.92m、玄門部幅3.44mある。左右側壁が3石、奥壁が1石で構成されるが、いずれも1段を残すのみである。両側壁は表面を

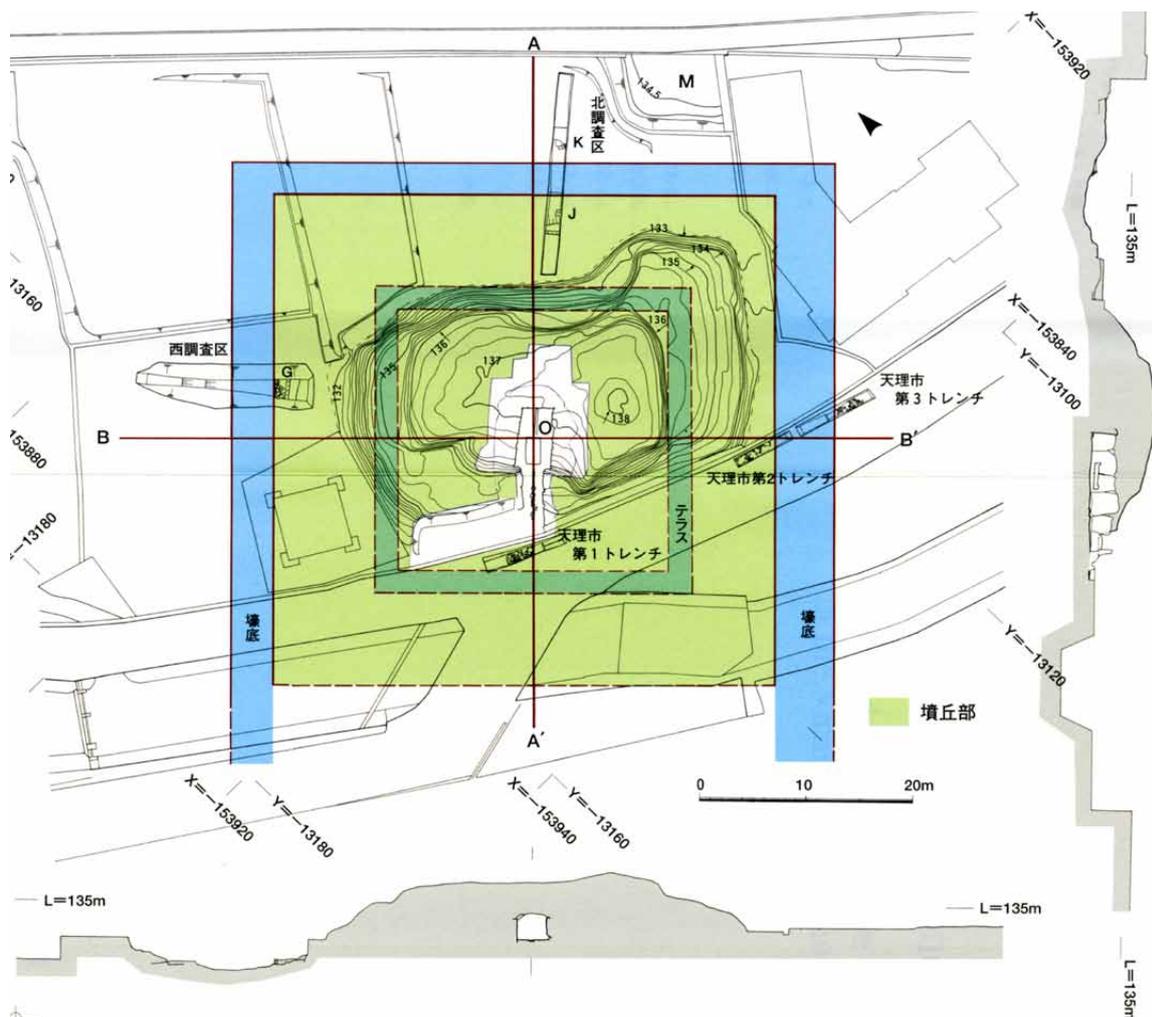


図17 ハミ塚古墳墳丘測量図（奈良県立橿原考古学研究所 2003）

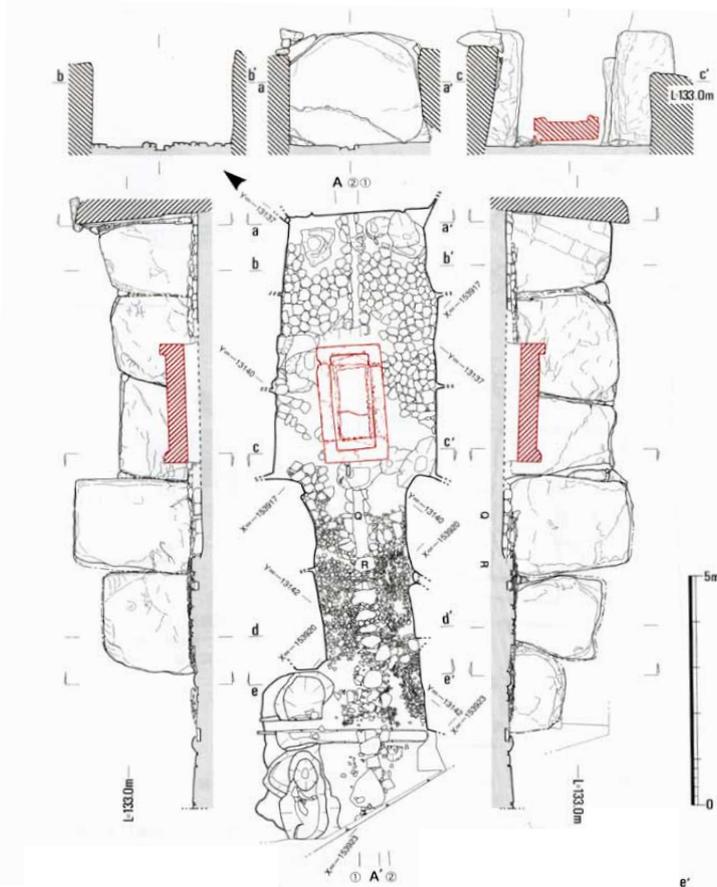


図 18 ハミ塚古墳横穴式石室実測図
(奈良県立橿原考古学研究所 2003)

小叩きして整えており、奥壁も平滑に仕上げられ、表面に鑿跡を残す。

玄室の床面の平坦な石の上にはベンガラの付着した大量の白石と黒石の玉砂利が敷かれていた。白石の石種は石英質片岩で、産地は和歌山県紀ノ川河口から海南市の海岸部と考えられている。大きさは直径 1.5~ 3 cm 前後のものが多い。黒石は砂岩で、和歌山県有田川下流から白浜の海岸部のものとされる。大きさは 3 cm 前後のものが多い。石棺直下のものを除いた総量は白石が約 60,000 個、黒石が 19,000 個である。また、石棺直下の玉砂利には破碎された須恵器片が点在しており、棺を据える前に須恵器片を撒いていたと推測されている。

玄室には竜山石製の剝抜式家形石棺が納められていた。石棺は楔により数十片に破碎されていたが、蓋は長さ 270cm、幅 138cm、高さ 58cm で、両長側片に 3 個の縄掛突起が付くものと考えられている。

る。棺身は長さ 258cm、幅 133cm、高さ推定 93cm あり、全面に鑿跡が残る。

石室は基底石を 1 段残すのみであるが、その形態は、奥壁が 2 段から 3 段積み、玄室側壁は 3 石を 3 段積み、袖石は 1 石で直接天井石を支え、前壁は 1 段であったと推測されている。羨道は、袖石から 3 石目までは 1 段で、そこから先は 2 段積みと考えられている。

古墳の時期は出土した須恵器から 6 世紀末から 7 世紀初頭の頃が考えられる。

【文献】

奈良県立橿原考古学研究所 2003 『天理市ハミ塚古墳発掘調査報告書』

10) 塚穴山古墳

天理市勾田町

西山古墳の北に隣接する直径 65 m の円墳で周囲には外堤を伴う濠が巡り、その外径は 112m に達する。

埋葬施設は玄室長 7 m、幅 3.1 m、現存高 3.70m、羨道長 9.50m、同幅 2.60m の横穴式石室で、南南西に開口する。



図19 塚穴山古墳墳丘測量図

この横穴式石室は1964年に実施された第1次調査によって初めて、その存在が明らかとなった。調査当初から墳丘は上半が削平され、石室の天井石も失われていた。調査に際して、墳丘の測量調査が実施され、その規模が明らかとなった。

玄室は床面に大型の平らな石を敷き、周囲に排水溝を巡らしており、羨道には礫が敷かれていた。石室は中世に墓として利用されたため、中世の土器類と石造品が多量に出土している。古墳に伴う遺物は凝灰岩製の石棺の破片多数と土師器・須恵器の破片若干、鉄製銀糸捲刀把断片、鉄鎌1などである。

1988年に埋蔵文化財天理教調査団により実施された第2次調査では、西山古墳の外堤に重複して塚穴山古墳の外堤が築かれていることなどが明らかとなった。

塚穴山古墳の横穴式石室は明日香の石舞台古墳に匹敵する規模を有し、墳丘ではその規模を大きく凌いでおり、終末期古墳としては屈指の規模を誇る7世紀前半の古墳である。



図 20 塚穴山古墳の横穴式石室

【文献】

近江昌司・白木原和美 1965「天理塚穴山古墳調査概要」『日本考古学協会昭和 40 年度大会研究発表要旨』日本考古学協会

竹谷俊夫 1990「塚穴山古墳発掘中間報告」『天理参考館報』第 3 号 天理大学出版部

11) 峯塚古墳

天理市杣之内町

天理市杣之内町に所在する古墳時代終末期の円墳で、丘陵の南斜面をカットして築かれている。

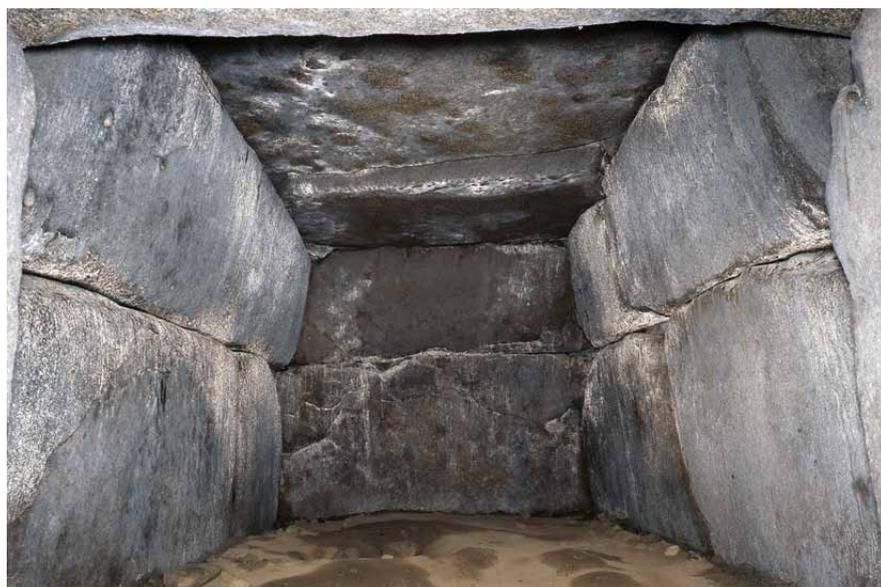


図 21 峯塚古墳の横穴式石室 (天理市教育委員会提供)

墳丘は 3 段築成で直径は下段から 35.5m、28.4m、17.6m あり、各段には葺石が施されている。下段と中段には径 5 cm 程の円礫が、上段には凝灰質砂岩の切石が用いられており、墳頂にも円礫が敷かれている。

埋葬施設は全長 11.1 m の切石造りの横穴式石室で、玄室長 4.46m、奥壁部幅 2.58m、玄室高 2.40m、羨道長 6.62m、



図 22 峯塚古墳近景（山内 1992）

玄門部幅 1.92m、羨門部幅 2.28m、羨道高 1.70m ある。

石室は古くに盗掘されていたらしく、出土遺物などは不明である。しかし、埋葬施設が岩屋山式と呼ばれる表面をきれいに整形した両袖式の横穴式石室であることから、杣之内古墳群では塚穴山古墳に後続する 7 世紀中葉の首長墳とみられる。

【文献】

山内紀嗣 1992『奈良県天理市 峯塚古墳・西乗鞍古墳・鐘子塚古墳測量調査報告』

12) 杣之内火葬墓

天理市杣之内町

天理市杣之内町で発見された火葬墓で、西に延びる丘陵尾根のやや南寄りに半径 5.5 m の半円形の穴を掘り、砂質土と粘土を交互に積んで丁寧に埋め戻した後、火葬骨を入れた木製の櫃（箱）を納めるための墓壇が再度掘られている。

墓壇は平面形が方形のもので、1.3 × 1.4 m、深さ 0.9 m の規模があり、一辺が 70 × 45cm 程の木櫃が納められていた。身はコウヤマキ製で、蓋には杉の板材が



図 23 出土した海獣葡萄鏡



図 24 杣之内火葬墓全景

使われていた。木櫃の残りは良くなかったが、ここからは細片となった火葬骨がまとまって出土している。火葬骨と共に銀製のかんざしや、鳩目形の金具が出土している。かんざしは火葬の際に高熱を受け、一部が溶解していた。

この木櫃の外からは海獣葡萄鏡が1面出土した。これは精巧な作りの中国唐代のもので、恐らく遣唐使によってわが国にもたらされたのものであろう。同型鏡としては黒川古文化研究所蔵品や天理参考館蔵品などが知られている。

杣之内火葬墓からは年代を決定できるような土器は出土しなかったが、出土した海獣葡萄鏡などから奈良時代のものであったと考えられる。また、その規模や火葬墓の入念な造作、副葬品の海獣葡萄鏡の存在などから高位の貴族のための墓であったとみられる。

【文献】

埋蔵文化財天理教調査団 1983『奈良天理市 杣之内火葬墓 杣之内グラウンド用地調査報告書 1981. 6～11 調査』考古学調査研究中間報告7

13) 石上神宮

天理市布留町

布留川の南岸に位置する石上神宮はフツノミタマを祭神とし、古くより物部氏によって祭られてきたとされる。フツノミタマは神剣で、記紀によると神武天皇が日向より東征し大和に入るに

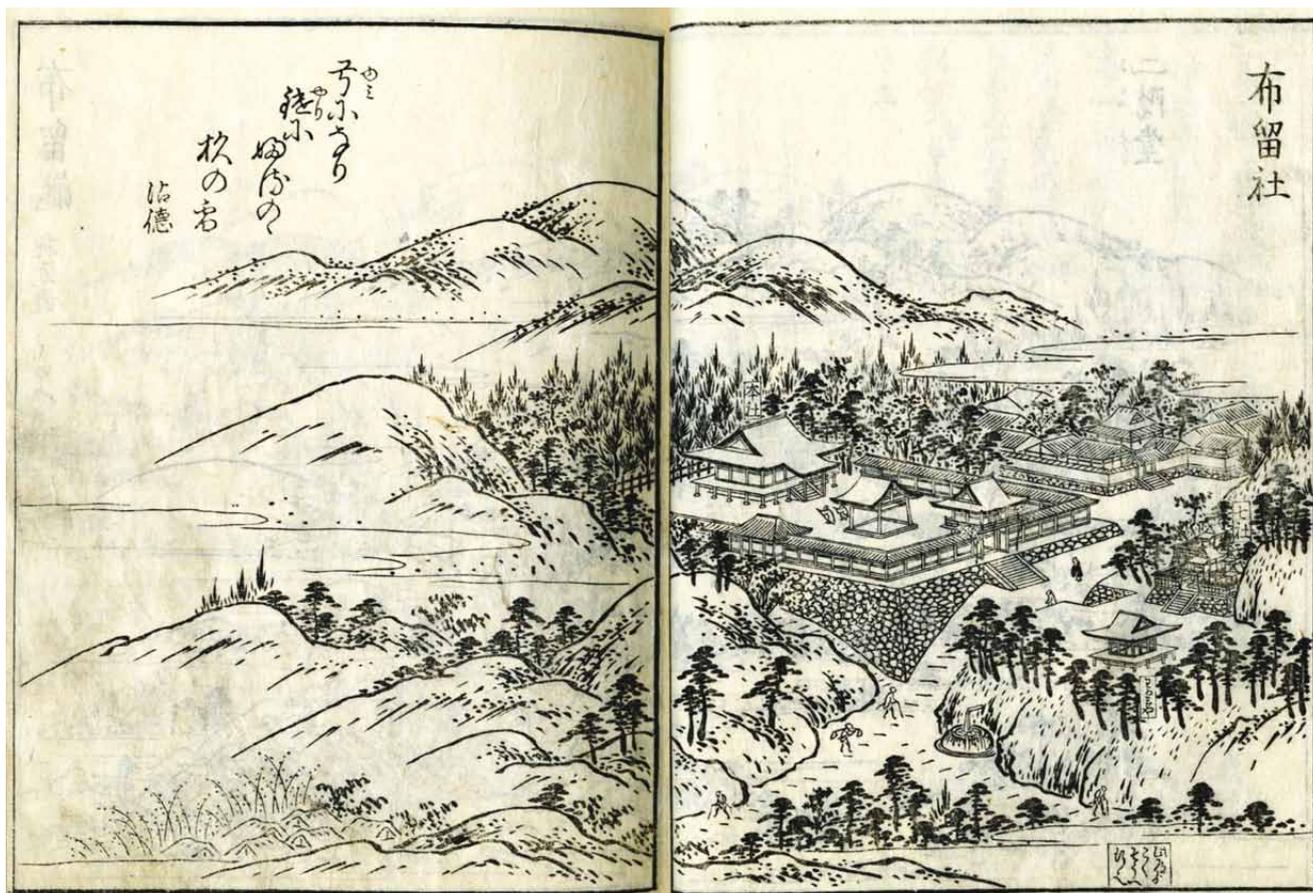


図 25 石上神宮の図

あたって、熊野で難にあった時に天より遣わされたのがこの神剣で、その靈威により勝利を収めたという。この神剣が崇神天皇の時に宮中から石上神宮に移し祀られたのが、石上神宮の創始と伝えられる。垂仁天皇の治世には五十瓊敷命（いにしきのみこと）が剣一千口を造って神庫に納め管理したことが伝えられており、石上神宮の武器庫としての性格を読み取ることができる。また、五十瓊敷命がその管理を妹の大中姫に譲ろうとしたところ、大中姫はそれを辞退して物部十千根大連に委ねたこと、そして、それ以降、物部連が石上神宮の神宝を治めたことが書紀には記されている。

このように記紀を通じて、石上神宮の祭神の性格や武器庫としての役割、物部氏との関わりを知ることができる。

1874年、大宮司菅政友は石上神宮の禁足地の発掘調査を行った。その際多数の遺物と共に出土した一振りの剣がフツノミタマとして本殿に祭られている。

【文献】

石上神宮 1929『石上神宮寶物誌』 大岡山書店

石上神宮 1986『石上神宮の社宝』

藤井稔 2005『石上神宮の七支刀と菅政友』 吉川弘文館

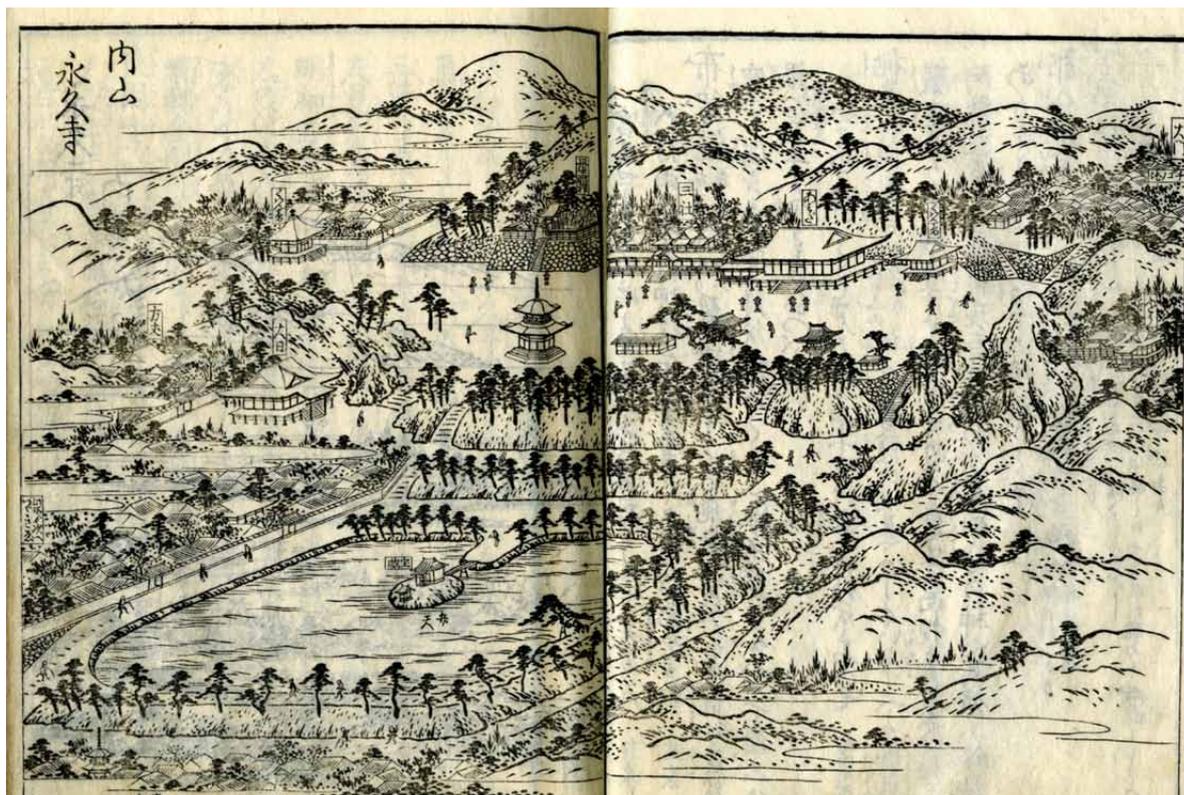


図 26 内山永久寺の図

14) 内山永久寺

天理市杉之内町

天理市杉之内町にあった真言宗の寺院。永久寺は永久年間(1113-18)に鳥羽天皇の勅願によって創立されたので、時の年号により永久寺と称された。当初は多くの堂塔が立ち並び、江戸期には寺領 971 石が安堵され、「西の日光」と呼ばれるほどであった。寛文年間にはなお 52 の堂宇があったといわれる。しかし、明治の廃仏毀釈により堂塔はすべて消滅し、仏像や障壁画、仏画などは散逸した。東大寺の多聞天・持国天像(国重文)はもと内山永久寺のものであった。また、永久寺の鎮守、住吉社の拝殿は、1914 年に移築され石上神宮摂社出雲建雄神社の拝殿となった。現在国宝に指定されている。



図 27 往年の面影を今に残す本堂池

【文献】
秋永政孝・小田基彦 1958「第二章 中世」『天理市史』 天理市史編纂委員会
天理市教育委員会 2004「内山永久寺」『山の辺の道の遺跡を訪ねて』